

次の文章を読み、設問に答えなさい。

朝、あたたかいミルクの匂いを嗅ぐとなぜかまた眠くなる。ヒナコはマグカップに口をつけたままで続けざまにあくびをした。

ミオがテーブルの正面からそんな妹をながめる。「ヒナコ、どっぴかにしたら？ 飲むのかあくびをするのか」パンをほおばりながら「口はひとつなんだからさ」

ヒナコは答えず、またひとつあくびをする。ママがカウンター越しに「ミオ」と声をあげる。「あんたも同じよ、ミオ。食べながら人をからかっていると舌をかむわよ」

「ヒナコに言ってるのに」ミオはママの方に身体の向きを変える。「そんなふうにママが割り込むからね、姉妹げんかも親子げんかになっちゃうんだよ……昔っからだけだよ」

そんな姉と母のやりとりにもヒナコは知らん顔で、ネコみたいに背を弓なりにそらせて大きく伸びをした。五年生の終わりからヒナコの背は急に伸びはじめた。中学一年生になった今は、自分でも伸びをするたびに腕が遠くまで届くような気がする。ヒナコはミルクを飲みながらミオを見る。「今日、会った。前の友だちに」

「あ、今日だったんだ。仲良しの……誰だったけ？」

「杏とサトちゃん」

①引越してきてからはじめてじゃないの。ヒナコがあふたりに会ったのって」

「そう」ミルクの白い膜をつけた口を、ヒナコはほころばせる。ミオもつられてほほえむ。玄関から大きな声がした。

「おはよ。いるかなあ」

あたふたと玄関にとんでいったママは、しばらくすると袋をぶら下げて戻ってきた。「野菜をくれた」ヒナコが袋とママを交互に見ながら聞く。「だれ？」

「近所のおばさん」

「名前は？」

「知らない」

「こんな朝早くにふつうに入ってきてきちゃうの？ 知らないおばさんが」

「顔は知ってる。犬の散歩でうちの前を通ってる」ミオも口をはさむ。

「だいたい玄関があいてるのが、おかしくない？」

ママは泥だらけのだいこんや菜っぱの入った袋をのぞきこんで答える。「パパに言つてよ」ランニングに出かけたパパが鍵をかけ忘れたのだろうと言う。

「またランニング？」

「そう。前の家とちがつて畑の空気がおいしいとか言つて——」

「うそだね」ヒナコがささげる。「ぜつたいうそだね。aヒリョウをまいたあとの畑つてすごいにおいだよ。空気がおいしいなんて、そんなのパパの負け惜しみに決まってるよ」

「負け惜しみだなんて。勝ったとか負けたとかいう話じゃないでしょ」

「仕事は勝ち負けだつて、いつかパパが言つてたよ。それがうまいこといかなかったんでしょ。だったら」

やっぱり負けたのではないか、しかしさすがにそこまで言うのもためらわれて、ヒナコは口をつぐんだ。いきなり引越すのだと聞かされたとき、一番抵抗したのはこのヒナコだ。遠くなくても高校は変えずにすんだミオとはちがい、転校を余儀なくされたのだ。仕事の都合でやむを得ないとパパに説明されてもなかなか納得はできずにいた。ヒナコは、バターをぬりたくったトーストにシナモンを大量にふり、さらにメープルシロップをかけたように盛大にかけた。

「太るわよ」と、ママがいすにどしんと座った。「確かにね、新しいところに慣れるのって、簡単じゃないわよ。ま、お野菜をくれるのはうれしいけどね」

ミオがママの湯のみにお茶をついだ。「まあ、A郷に入れば郷にしたがえ、つてことわざもありますし」

「ありがと。ミオ、難しいことば、よく知ってるわね」

「こう見えて、もう高校二年生ですから」

「でもまあ、前はよかったとか、振り返つてもはじまらないからね、ここでがんばるしかないってことよね」ヒナコはだまっていた。うっかり反論して、パパの仕事の事情もわかってやりなさいなどと説教されるのはたまらないし、しゃべった息でシナモンのbコナが飛んでむせるのめかなわなかった。ヒナコはトーストをもくもくとほおばった。

インターホンが鳴り、三人がそろってモニターをながめた。

「ヒナコちゃん、いますか」

50

モニターの魚眼レンズの真ん中に、鼻ばかりが大きく見える女の子の顔が映った。

「だれ？」と聞くミオとママを無視して、ヒナコはティッシュで口をぬぐいながら、玄関に向かった。ドアを開けてみると、同じクラスの山脇多恵さんが外に立っていた。

「多恵さん、どしたの？」

「ちよつと用事があつて」

55

玄関に入り込まれる前にと、いそいでサンダルをつつけてヒナコの方から外に出た。多恵さんは、冷えはじめてきた十月の空の下で寒そうに肩をすぼめていた。なぜかいつでもこの人は寒そうだとヒナコは小柄な同級生を見おろした。

「渡したいものがあつて」多恵さんは一枚のチケットをヒナコにさしだした。「ヒナコちゃん、音楽と踊りが好きだつて言つてたから。今度いっしょに行かないかなと思つて」

60

「え？ 音楽と踊り？ だれかのコンサート？」ヒナコはうけとつたチケットをあわてて見た。こちらに引越してきてからずっと、あやしげな店から流れてくる演歌ぐらしいか生の歌声は聞けなかったので胸がはずんだ。

「コンサートつうのはちよつとちがうかもしれないけど。……太鼓。宮前町に伝わる宮前太鼓。今度、市民ホールでやるからその招待券。竜の舞もあつて迫力があるよ」

65

「は？」ヒナコは多恵さんに、チケットを返そうかと思つた。この人に音楽や踊りの話なんかするんじゃないかつた。ヒップホップのダンスが好きで、友だちと一緒にスクールに通つていた、なんて熱く語つてしまった自分はばかみたいだ。多恵さんは続ける。

「前に父さんがホゾン会に入つて宮前太鼓たたいてたんだ」

「お父さん？」

70

「すぐくまかつたんだよ、あたしの父さん」照れたように、多恵さんは短い髪をかいいた。

②なんで照れるの。お父さんが自慢なわけ？ ヒナコは下を向いた。自分はたつた今、父親の悪口を言つていたところだったのに。だいたい多恵さんはお父さんと暮らしてはいないはずだ。父親は都心に働きに出ていると彼女自身から聞かされていた。いつ帰つて来られるのかわからないとも。どこかでホームレスになつてゐるらしい、そんな噂を耳にしたことさえもある。噂はともかくとしても、家族の元にも帰らずにいて、自慢できる父

75

親と言えるのだろうか。ヒナコは目をふせたままで言つた。「あのさ、ごめん。これから出かけるんだ」

「出かけるつもりしかして、まるはちショッピングセンター？」

「……どこ？ それ」

「まるはち、知らない？ 丸の中に八の字でまるはち。今日、売りつくしセールやるんだよ。すごく安いんだから」

80

「ちがう。前の街の友だちに会うの。こつちに引越してから始めて帰るの」

「帰る？」

「③いや、まちがえた。行く。行くのは三か月ぶりなの」

多恵さんはさらに電車で行くのかと聞き、そうだとつて帰りは何時だと聞いてきた。

「どうして？」

「そこまで聞くかな」

85

首をかしげるヒナコにかまわず、多恵さんは声をひそめた。まるでだれも知らないひみつを教えてくれるとでも言うように。「帰りは六時過ぎにしたらいよいよ。そしたら駅員さんが改札からいなくなるから、お金、足りなくてもだいじようぶだから」

90

転校手続きをしたのは夏休みに入つてからで、新学期からは二か月。友だちを選ぶ余裕はヒナコになかつた。近づいてきてくれたクラスメイトが妙になれなく、おまけに不正行為をけしかけるような人だったとしても仕方がない。昼休みにひとりでぼつんと座つてゐるよりはマシだった。

多恵さんはひそひそとささやく。「あのね、無人駅だったら、お金がなくなつちやつても、ちゃんとうちに帰つて来られるんだよ。ね、いいでしょ。ふとつばらな駅でしょ」

それはやつてはいけないことなんだよ。見つかったら逮捕されちゃうかもしれないんだよ。ヒナコは胸のうちでつぶやく。

95

そんなヒナコの気持ちも知らずに、多恵さんはこにこする。「ほんと、いい駅だからね。あたし、ひとりでよく行くんだ」

「駅に？」ヒナコは首をかしげた。

「うん」

「……多恵さんって、鉄道マニアかなんか？」

「ちがうけど。なんで？」

「いや。駅によく行くっていうから」

「だって、あの駅、きれいで好きなんだもん」

「あ、そう」

かみあわない話を続けるよりも、これから出かけることを思い出してもらおうと、ヒナコは玄関の時計を見るそぶりをした。

多恵さんはやっと気づいたように、「じゃ、スポーツ大会、がんばろうね。騎馬戦よろしく」と、一步後ろにしろぞいた。

「あ、そうだね。よろしく」

秋のスポーツ大会では女子も騎馬戦をおこない、体育班ではヒナコたち三人で彼女を背負うことが決まったばかりだった。へへと笑って多恵さんはふぞろいの歯を見せた。多恵さんは手をふって帰っていった。

ヒナコはドアを開けて鍵をかけた。手の汗で湿ったのか、招待券はじつとりと重いような気がした。④見もしないでふたつに折るとポケットにつつこんだ。

部屋に戻るとミオが声をかけてきた。「同じクラスの子？」

「体育班が同じの子」

「友だち？」

「ちがう。騎馬戦の騎手」

「騎馬戦？……ってことは、ヒナコが乗せるってこと？ スポーツ大会の？ それの打ち合わせ？」

「そんなところ」

「なんて名前の子？」

「知らない」

とまどうミオを尻目に、パン皿とカップを乱暴に重ねると、ヒナコはキッチンにどしどしと足音をたてて向かった。

ヒナコは駅に向かった。都心から二時間ほどの駅は、新しい住宅が増えた何年か前に畑をつぶして建て替えられたという、まだ新しい駅舎だった。

急勾配の屋根の中心に時計がはめこまれた、どこにでもありそうな建物だった。この駅を好きだと多恵さんは言っていた。しかし新建材だけで造られた建物はぺかぺかと安っぽく、とんがり屋根も何かのまがいものめいて見え、ヒナコにはどこがいいのかまるでわからなかった。

待ち合わせた駅では杏とサトちゃんが先にヒナコを待っていてくれた。混雑した改札で人混みをすり抜けると、ふたりはかけ寄ってきた。「あいたかったよお」と、ヒナコの手をとってぴんぴんとはねた。

元気だった？ また背がでかくなった？ そっちの町はどう？ イノシシ出る？ ふたりは同時に喋り、同時に笑った。

ふたりともちつとも変わっていないと、ヒナコはほっとした。

(中略)

午後のひざしがかげつてきた頃に、もう帰らなければならぬとヒナコはやっと重い腰を上げた。少し早めにマッシュンを出て、三人で駅まで歩くことになった。駅に続く道の途中に大きな公園がある。三人でダンスの練習をしたこともある場所だった。

「そうだ」と杏がサトちゃんの肩をたたいた。「ハローおじさん、ちようど来てる時間じゃない？」

「そうか。ヒナコは知らなかったよね」

「ハローおじさん？」

「うん。ちよつとした有名人」

最近、公園に来るようになったおじさんという。子どもが好きらしく、気安く話しかけてくるのだそう。最初の頃こそみんな警戒していたけれど、話してみると別にあぶない人でもないようで、ふたりは缶ジュースをおごってもらったこともあると言う。

「近くにあるハローワークに通ってるっていう話で、それからはみんな、ハローおじさんって呼んでるんだよ」

サトちゃんがガムをかみながら教えてくれる。

150 三人で並ぶには道はせますぎる。いつの間にかヒナコはふたりの後ろをついて歩く。公園の入り口で杏があたりを見回した。

「いるかなあ。だいたいいつもこの時間には、ベンチでたばこ吸ってんだけど」

少し不安になっていたヒナコは、ふたりの袖をひっぱった。「だいじょうぶ？ その人、こわくないの？」

155 「だいじょうぶだよ。むしろヒナコの方がデカイからこわがらせるかも」尻込みするヒナコにかまわず、ふたりは公園に入ると、いたいた、とベンチに座っている人の背中へ声をかけた。

「おじさん、こんにちは」

160 「わいはー。いぎなりくつからびつくりしたべ」たばこを吸いながらこちらをふり向いた人は、おじさんというよりおじいさんのように見えた。よれよれのワイシャツの上に古ぼけた上着。どちらもぶかぶかで肩からずりと全部が落っこちてしまいそう。えりから伸びてる細い首や薄くなった頭の感じはコンドルに似ているとヒナコは思った。

「どしてらー。元気ではが」

165 ちがう国の言葉みたいだとおかしくなった。杏とサトちゃんはもう笑いだしたいのをがまんして目くばせしている。杏がおじさんの前に身をかがめた。「もう秋なのにおじさん、まだ同じ服だね。寒くないんですかあ」

おじさんは、指が焼けそうに短くなったたばこを地面でもみ消し、缶に入れてふたをした。「んだきや。さぶくてどおすべの。おめだちもさぶいべ」

ふたりはくすくすと笑いながら、「寒いですよ。寒くなったから、おじさんもそろそろ青森とかに帰るんじゃないですか？」

170 サトちゃんのなまいきな **クチヨウ** にも、おじさんは気を悪くするでもなく笑っている。

「んだなあ。稼がねばなあ。家さ帰るじえんこがねえと電車も乗れねえ、帰えるに帰えれねえだでなあ」

杏とサトちゃんは、顔の前で手をふった。

「わかんない。おじさん、何言ってるのかわかんないよ」

「じえんこ、つてなんですかあ？ イタリア人の名前？」

「ちげえ。じえんこはじえんこ。お金のことだがな」

絶対わかんないって、とふたりはげらげらと笑いころげた。

175 ⑤ おじさんは、三人の顔を順番に楽しそうにながめる。「おらちにも娘っ子がいだんだ。もう今じゃうちさ出て町で働いてるだがなあ」顔をぷるりと手で、「ほんでもおめだち見ると、家さ帰えりたくなるだ。まだめんこい娘っ子のまんま、家でおらのこと待っててくれる気がしてならねえなあ」それからおじさんはヒナコを見つめた。「はじめて見るねっちゃだが。これがらどこさいぐの」

180 ヒナコがどぎまぎしていると、杏がかわりに答えてくれた。「この子、うちに会いに来てくれて、今から帰るところ」

「せば、さんぶいで風邪ひかねんでの」おじさんの目がやさしく細くなって、折り紙をたたんだようなしわの中に埋もれた。

185 そうだ、とサトちゃんが手をたたいた。「ねえおじさん、この子、これから遠くまで帰るから、あったかいココアでも飲ませてやってほしいんですけど」自販機のある方を指さした。

「えっ？ そんなの悪いよ。いらないよ」ヒナコはあわてて顔の前で手をふった。

すると、おじさんは笑顔で何か言って立ち上がり、ゆっくりと歩き出した。下がり気味の肩がゆれて木立の陰に消えていった。

190 「おじさん、歩くの遅すぎでしょ」と、杏が言い、「実はムーンウォークで移動、とか？」と、サトちゃんがふざける。ふたりのやりとりでヒナコも笑った。

しばらくすると、ぽつぽつと雨がふってきた。サトちゃんがバッグを頭の上にかざして木の下に向かい、ヒナコたちも続いた。杏が腕時計を見た。「ヒナコ、あんま時間なかったよね？」

「そうだ。ヒナコ、もう行かなきゃ、じゃん」

195 自分のことを気づかってくれる言葉はうれしかったけれど、「でもおじさんは？」とそちらの方が気になった。

「いいんじゃない。そのまま、帰っちゃったかもしれないし」

「遅すぎるもんね。どうせ自販機のそばを通るから、わかるよ」サトちゃんはヒナコの背中を押した。

公園の出口のところに自販機はあったが、おじさんの姿はなかった。自販機のココアの下には売り切れの赤いランプがついていた。

「やっぱいいないよ。ほら、もう行こうよ」

200 ヒナコは後ろをふり返って見た。反対側の出口、うす暗い木立の向こうに小さくおじさんの姿が見えた。あわてて足をとめ、ふたりに声をかけた。

「ちよつと待つて。ほら、おじさん、戻ってきたよ」

コンビニの小さい袋をふたつ下げて、おじさんはベンチに向かつて歩いている。自販機が売り切れだったので、コンビニまでわざわざ買いに行ってくれたのだろう。

戻ろうとするヒナコを否はひきとめる。「いいから、行こうよ」

205 サトちゃんもヒナコの腕をひっぱった。

「袋、ふたつ持つてるじゃん。片方は肉まんかなんかじゃないの」

否も肩をすくめた。「たしかに。それはやばいかも」

「おじさんのくれる肉まんとかは、ちよつと、ね」

210 気味悪そうに顔をしかめるサトちゃんの手を、ヒナコはつかんだ。「だって、せつかく買ってきてくれたんだよ」

いいから。めんどうだから。と、ふたりはかけだした。置いていかれそうで、ヒナコもあわててふたりのあとを追った。ベンチが木立にかくれて見えなくなる前に、もう一度ふり返ってみた。おじさんは来たときと同じように後ろを向いて座っていた。ベンチの一部みたいにしんとして。街灯の照らす光の中に雨がきらきら光っていた。

215

電車の中、ドアの横に立ってヒナコは雨粒の走るガラス窓をながめていた。やっぱり戻ればよかったかな。おじさんにココアをもらえばよかったかな。とりとめもなく、そんなことを考えていた。

否もサトちゃんもおじさんの言葉がわからないと言っていた。ふたりには本当に通じなかったのかな。

220

⑥おじさんは稼がなければ帰れないと言ったのだ。電車賃さえもなければ帰ることもできない、と。遠く離れて暮らすうちには、いつかあたしの言葉もふたりに通じなくなるのだろうか。

うん、ちがう。ヒナコは首をふった。そして下を向いてくちびるをかんだ。痛くなるまでかまなければいけなかった。だって一緒に笑っていたのだから、あたしは。

途中の駅でドアが開くたび、見知らぬ人が冷たい風を連れてきた。うすうすと寒かった。⑦寒くていい。痛く

225

ていい。自分にはそれがちようどいいのだとヒナコはくちびるをかみ続けた。

窓の外はすっかり暗くなった。好きだった街が遠ざかり、灯りがまばらになっていく。

——さんぶいで風邪ひかねんので

ぼつんぼつんとともる灯りの中に、おじさんの笑顔が浮かんだ。

230 電車が駅についた。雨はまだやまない。六時過ぎた窓口にはもうシャッターがおりていて、駅員のいるよう

すはなかった。無人の改札を乗客たちは通りすぎる。カードを機械にタッチする人、切符を放るように投げいで

く人、中に、どちらもしないで素通りする人もいる。みな押し黙って歩いていく。ヒナコは、切符を台の上に置

いて改札を通りすぎた。顔を上げたとき、見知らぬふたり連れが目にとまった。母親らしき人が、女の子の手を

ひいて改札の前に立っている。女の子はとじた長い傘をささげるように持ち、背伸びをして乗客の顔を見定めて

いる。きつとお父さんを待つているのだろう。ひとりひとりをにらみつけるように見るまなざしが真剣で、ヒナ

コは思わずほえんだ。ふつと、多恵さんの言葉が耳によみがえった。

235 —あのね、無人駅だったら、お金がなくなっちゃっても、ちゃんとうちに帰って来られるんだよ。ね、いいで

しよ。

240

多恵さんがひみつみたいに教えてくれたこと、⑧あの言葉の意味にヒナコははじめて気がついた。あれはヒナコにではなく、父親に伝えたい言葉だったのだ。たとえ仕事がうまくいなくても、電車の運賃さえも稼げなかつたとしても、この駅ならば帰ってこられるから。この駅が好きだと多恵さんは言っていた。だからよく来るのだと。好きなのは、きつとここがお父さんの帰ってくる駅だからだ。父親を待つ女の子に、多恵さんの小柄な姿が重なった。ヒナコは立ちどまった。ポケットに手をつっこんだ。⑨中をさぐり、招待券をとりだすと日にちをたしかめた。それからそつと折りたたんでバッグに入れ直した。

245

【駅の階段を降りると、ロータリーにはミオがいた。どこに行っても電車に乗る前には、必ず家に連絡してお

くのがヒナコの家の決まりごとだった。傘を持たずに出た妹のために、ミオは迎えに来ていたのだ。ミオは傘を

パンと広げた。水滴が飛んで明かりにきらめく。

「おかえり」

「ただいま」

ヒナコはミオの持つ傘の下に飛び込んだ。紺色こんいろの大きいパパの傘。余分な傘を持つのをきらうミオは、誰かを迎えに行くときには必ずこの傘を一本だけ持って出た。」

「楽しかった？」

「うん」

「ふたりとも元気だった」

「うん」

肩を寄せて歩き出すと、

「おねえちゃん、あのね」と、ヒナコはぼそぼそと話しはじめた。「あのね、今朝来てくれた人……体育で同じ班だった言った人」

「ああ、騎馬戦の？」

「騎馬戦の馬に乗る人。おねえちゃんに聞かれたとき、名前、知らないって言ったけど」

ミオはだまって妹の話に耳をかたむけた。

「あれ、うそだった。あの人、多恵さんって言うの」

「そう」

「それに、友だちじゃないって言ったけど」ヒナコはちよつと言葉を切って、「それもうそかもしれない」それを聞いてミオは笑った。「B馬には乗ってみよ、人には添うてみよ、だね」

「なに、それ」

「ああ、ヒナコが馬だったつけ。だったら、乗られてみよ、か」

「意味、わかんないよ」

「⑩とにかく騎馬戦、多恵さんといっしょにがんばれ。ぜったい負けるな。帽子は死んでも敵に渡すな」

駅前の交差点を横切るとき、ヒナコは駅をふり返って見た。雨の下、暗く沈んだ町の中で、駅舎だけが灯りをともしていた。白いとんがり屋根は明るく輝き、お城みたいにきれいだと思った。また雨足が強くなった。

⑪ヒナコは、身体をちぢめるようにしてミオにくつつき、ミオはせまいと文句を言いながら妹をひき寄せた。

(安東みきえ『天のシーソー』(ポプラ文庫版)より)

〈語注〉

※① 転校を余儀なくされた：転校しなければならなかった

※② 郷に入れば郷にしたがえ：その土地に住もうとする人は、その土地の文化に従うべきである、という意味のことわざ

※③ ヒップホップ：アメリカの若者たちの間で生まれた、新しいダンス音楽

※④ まがいもの：にせもの

※⑤ ハローワーク：仕事の紹介などをする役所

※⑥ おめだち：お前たち

※⑦ めんこい：かわいい

※⑧ さんぶいで風邪ひかねんでの：寒いから風邪ひかないでね

※⑨ ムーンウォーク：ダンスで用いられる特殊な歩き方

※⑩ 馬には乗ってみよ、人には添うてみよ：馬が良いか悪いかは乗ってみなければわからないし、人柄ひとがらが良いか悪いかは付き合ってみなければわからないので、何事も経験してみないとわからない、という意味のことわざ

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線 a 「ヒリョウ」(30行目)、b 「コナ」(46行目)、c 「ホゾン」(67行目)、d 「クチョウ」(168行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 線①「引越してきてから」(14行目)とありますが、

(1) ヒナコの一家が引越すことになった原因は何ですか。十字以内で答えなさい。

(2) ヒナコと母は、引越し先の町で暮らすことについて、それぞれの思うていますか。答えなさい。

三 線②「なんで照れるの。」言っていたところだったのに」(70～71行目)とありますが、この時のヒナ

コの気持ちはどのようなものですか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分とちがつて父親を自慢する多恵さんに反発を覚えながらも、うしろめたさを感じている。

イ 自分とちがつて父親を自慢する多恵さんにいらだちを覚えながらも、うらやましく思っている。

ウ 自分とちがつて父親を自慢する多恵さんに疑問を感じながらも、それをかくそうとしている。

エ 自分とちがつて父親を自慢する多恵さんに不満を感じながらも、深く反省させられている。

四 線③「いや、まちがえた」(81行目)とありますが、ヒナコが「行く」と言うべきところを「帰る」と言ってしまったのはなぜですか。説明しなさい。

五 線④「見もしないでふたつに折るとポケットにつっこんだ」(111～112行目)とありますが、ヒナコがこのようなことをしたのはなぜですか。説明しなさい。

六 線⑤「おじさんは、三人の顔を順番に楽しそうにながめる」(175行目)とありますが、「おじさん」が「三人の顔」を「楽しそうにながめる」のはなぜですか。説明しなさい。

七 線⑥「おじさんは帰ることもできない」(219行目)とありますが、この内容を「おじさん」が言っているのは何行目ですか。数字で答えなさい。

八 線⑦「寒くていい。痛くていい。自分にはそれがちょうどいいのだ」(223～224行目)とありますが、ヒナコがこのように思ったのはなぜですか。説明しなさい。

九 線⑧「あの言葉の意味にヒナコははじめて気がついた」(237行目)とありますが、(1) ここで「はじめて」気がついたきっかけは何ですか。答えなさい。

(2) ヒナコは、「あの言葉」に多恵さんのどのような思いがこめられていることに気がついたのですか。説明しなさい。

十 線⑨「中をさぐり、招待券をバッグに入れ直した」(241～242行目)とありますが、ヒナコがこのようなことをしたのはなぜですか。説明しなさい。

十一 線⑩「【】の部分(244～250行目)には、前の街から帰ってくるヒナコに対する、ヒナコの家族のどのような姿がえがかれていますか。説明しなさい。

十二 線⑪「とにかく騎馬戦、多恵さんといっしょにがんばれ」(268行目)とありますが、ミオは騎馬戦の応援をすることで、ヒナコに対してどのようなことを伝えようとしているのですか。線 A 「郷に入れば郷にしたがえ」(41行目)、線 B 「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ」(264行目)というミオの言葉にも注目して説明しなさい。

十三 線⑫「ヒナコは、身体を妹をひき寄せた」(271行目)とありますが、

(1) 122行目までの場面とこの場面では、この町で暮らすことについて、ヒナコの思いはどのように変化していると考えられますか。答えなさい。

(2) ヒナコがそのように変化したのはなぜですか。この作品の中にえがかれている、さまざまな「家族」に注目して説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

